

水道ジャーナリスト 有村源介の

源流 本流 汽水城

NO.14 死者を弔う ～ブータン レポート第5信～



斎場・火葬場の全景



斎場・火葬場の内部。焼却施設

ブータンの首都、ティンプーの人口増加と都市化は、かつての首都の姿を知る人を驚かせているが、初めて訪問した人間にとっても、都市が飽和状態になりつつあることは瞭然だった。特に、道路の渋滞は深刻な状態になりつつある。ティンプー、いや、ブータンにある唯一の信号、交通整理（設備でなく人間による）も、近々、唯一ではなくなるだろう。当然、あらゆる都市インフラが必要であり、衛生・環境工学分野の現場を取材し続けてきた者としての興味は、衛生施設の整備状況とこれからの方向性であった。

人が死を迎えた後、故人の関係者が故人と別れのセレモニーを行う場所と弔いの最終施設を衛生施設とは呼ばないが、上下水道や空調施設、廃棄物処理施設よりも、ある意味では究極の最終施設、衛生的な考えをも包含した施設だと言えよう。それを「衛生」と称さないのは、人の死を考える時、「衛生」を超えた、あるいは、別の次元での価値観、思想が必要だからだろう。あるいは衛生工学に必須の「処理」という概念を忌避したか？生きていかなければならない人間にとって、人が死んだことを受け入れ納得できる手続きを必要としていると同時に、霊的なものの存続や復活を恐れ、それを消し去り生活圏から遠ざけようとしたりする。その一方で、死者の靈魂の永続性を願ったりすることもある。日本人の宗教は仏教が基本だから、遺骨を大切にし、先祖をいつまでも偲んでその「ありか」である墓を大切にする、と言えるほど単純で画一的ではないだろう。そもそも、日本においても多様な宗教があるし、何よりも今日の弔いの形は、非常に多様化している。「家」を基礎的な構造（母体）にした「〇〇家の墓」が基本と思われていたかつてとは異なり、海洋散骨、森林散骨、多数が納められる納骨堂、樹木葬——と多様化している。死後除籍（死後離婚）といった事例も、もはや珍しいことではない。

それを時代の変化と言えば説明はつきやすいが、それだけで説明出来るほど単純ではあるまい。昔から潜在的にあったものが、ここにきて解放されオープンになったと言えるの

ではないか。その意味で、時代の変化と言える部分はあるだろう。抑えられていた、あるいは表現しなかったものが表面に出てくることができる状況になった。

私自身、有村姓で分かる通り、見も知らぬルーツは幕藩体制下の薩摩藩（鹿児島県）で、宮崎県（伊東藩）の小さな村に先祖の墓があったが、1度も墓参りをすることはなかった。理由は幼い時から成人に至るまで、その時々私にとって、墓参りは何の意味もなかったからである。自分の息子が墓を大切にしないのは己の思想だと思わせてしまった親が墓参りをしなかったのは、余裕がなかったのか、意味を見出せなかったのか。何十年もたって、私の父親が死去してから、私が生まれた時から疎遠だった縁戚者が、墓の撤去を求めてきた。宮崎を訪問した私に、「我々お前の親戚はずっと墓を守ってきた。それは先祖を大切にしてきたからであり、先祖を大切にすることは、今の自分たち人間を大切にすることである。墓を大切にしないお前は人の道に悖るものである」と非難された。私は先祖の墓を大切にしない、許されざるものだったのだ。

ついでに、「墓を撤去するにあたって、我々に土地を買い取るように要求してはならない」とも言われた。初めて訪問した「有村家」の墓地は、日向灘を望む丘の上にあり、陽光が満ち溢れていた。

ブータンの首都・ティンプーの北にあるヘジョ地区郊外に、JICAプロジェクトによる小規模下水処理場が建設中だった。毛管浄化法がブータンで生き残っていた、と思いきや、日本の小規模下水処理で十分、活用されていたことを帰国してから知った。そして、処理場の横、同じ敷地に、遺体を送り出す施設があった。祭壇と焼却設備があったので、日本でいう斎場と焼き場を一緒にしたような施設という印象だった。ブータンでは遺体を焼却したのち、骨を砕いて川に流すと聞いた。ガイドの説明である。

墓をお参りし、先祖に手を合わすことを知らない私は、ひどく共感した。

「多死社会」到来と言われ、2037年には年間170万人が死ぬという。私が属する団塊の世代1年生（1947年生）はその時、90歳である。

訂正：前回「ブータン レポート NO.5」は「NO.4」の間違いにつき訂正します。）